

パジャジャラン大学との医学生交換交流プログラム

海外病院実習

実施日: 2023年1月10日~2023年2月2日

実施場所: ハサン・サジキン病院、ブスケスマス(インドネシア共和国・バンドン市)

群馬大学医学部付属病院、富士たちばなクリニック(群馬県・前橋市)

発行者: 医学部医学科5年 香村直輝



1. 実施概要

本プログラムには群馬大学医学部医学科の5年生4名が参加した。インドネシア共和国立パジャジャラン大学(Universitas Padjadjaran, UNPAD)の2年生2名、3年生1名、4年生1名と共に2023年1月10日からインドネシア共和国にて9日間、1月23日から日本にて10日間の臨床実習を行った。インドネシア共和国ではパジャジャラン大学附属病院のほか、保健所とかかりつけ診療所の役割を持つブスケスマスや現地の老人ホームにて、日本では群馬大学附属病院や富士たちばなクリニックにて実習を行った。

2. インドネシアでの実習

パジャジャラン大学は、様々な分野の高等教育を提供する国立大学として1957年にバンドン市に設立された。現在は16学部にて2万人を超える学生が在籍し、西ジャワ州の主要な大学として多くの卒業生を輩出している。私達はバンドン郊外にあるジャティナンゴールキャンパスの学生寮に宿泊し(図1)、一日のほとんどを共に過ごした。食事については基本的に全て用意してもらい形で、インドネシアの伝統的な食事に触れることができた(図2,3)。私達が過ごしたキャンパスはまるで一つの都市のように広大で、移動にはバイクや車、バスを利用していた(図4)。

UNPADの医学部は群馬大学と同じく6年制だが、各専門領域のユニットを学習する順番は自分で選択することができる。また、より研究者としてのスキルを磨くために自らのリサーチテーマを決定し、臨床実習前(4年生終了時)までに論文を作成することが求められている。英語のスキルも重要視されており、講義・試験は英語で行われ、TOEFLで一定のスコア獲得が必須となっていた。



図1: 大学の寮(Bale Wilasa)

窓は完全には閉まらない。土足なのでサンダルを持参した。トイレとシャワールームは一体となっており、使用後は床と便器もそのまま洗うことができる。



図2,3: ケータリング食とスナック

大学の施設で提供される食事はこのタイプのものが多かった。インドネシアの食事について、塩分はそこまで多くないが非常に辛いものが多く、殆どのものは揚げてあった。また、どこに行ってもスナックが用意されており、空腹を感じる時間は少なかった。



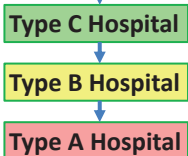
図4: キャンパス内のバス

バス停で手を挙げて止まってもらう。キャンパス内の道路はバイクが多く、駐車場にも大量のバイクが停めてあった。

UNPADの附属病院であるハサン・サジキン病院ではリハビリテーション科、結核病棟、皮膚科、精神科での実習を行った(図5)。病院は開放的で、緑が感じられる作りとなっていた(図6)。病院の外来はかなり混雑しており、患者だけでなく家族や親戚も一緒に来る人が多いとのことだった。大学病院での実習では結核やハンセン病など、日本ではあまり多くない疾患の患者を多く見ることができ、またその現状や対策も学ぶことができた。特にハンセン病については日本で治療法や診察法を学ぶ機会は殆どなく、非常に興味深かった。

ブスケスマスでは、健診に来た患者の血圧や血糖の測定、問診等を行った(図7)。こうした健診は地域のボランティアも手伝っており、強い地域コミュニティが保健活動を支えていることが窺えた。ブスケスマスは診療所としても機能しており、初期診療を担当している(図8)。インドネシアでも制度上は国民皆保険となっているが、未加入者も少なくないとのことだった。

Primary health services



←図8: 保険診療の順序

緊急時を除き、患者はまずかかりつけ医にかかり、紹介があれば大きな病院にかかることになる。Primary health servicesにはブスケスマスあたり、Type A Hospitalには大学病院などがあたる。基本的にブスケスマスには総合診療医が常駐する。



図5: ハサンサジキン病院にて結核病棟にも入るため、N95マスク着用での実習となった。結核外来は、結核疑い患者や服薬支援患者も含めて一日40名ほどだという。



図6: 病院の通路

多くの建物がそうであるように、外と通じている空間が多い。熱帯の気候に合わせた形と思われる。

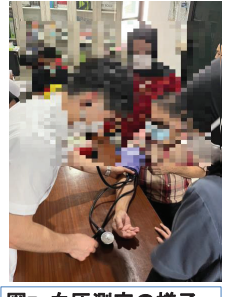


図7: 血圧測定の様子
基本的に聴診器を用いて計測する。検査機器も多くないため、限られた医療資源で診療することが求められていた。

3. 日本での実習

群馬大学附属病院では、小児科、産婦人科、総合診療科、腎臓・リウマチ内科、循環器内科、リハビリテーション科、核医学科で実習を行った。また、重粒子線医学研究センターやスキルラボセンター、法医学講座、生体防御学講座、公衆衛生学講座において施設見学やレクチャーを行った(図9)。UNPADの学生は非常に積極的で、質問やコメントも多かった。群馬大学外では、衛生環境研究所、群馬県庁、富士たちばなクリニックで実習を行った(図10)。インドネシアとは異なる制度や感染症対策、老人保健施設に驚きながら、熱心に学んでいた。



図9: スキルラボセンターにて学生のうちから、豊富なシミュレーションを用いた練習が可能なおことに驚いていた。



図10: 富士たちばなクリニックにて嚥下食の実習の様子。インドネシアの施設にはこうした食事はなく、嚥下が困難な入居者に対してはお粥などを用意していた。全自動入浴システムなども、非常に興味を持っていた。



図11: 最終日、空港にて空港での見送りの際、我々からの寄せ書きを贈った。プログラム開始時には、ここまで深い仲になるとは思いもよらなかった。お互いに別れを惜しみながらも、再会を誓いあった。

4. 感想

プログラムの期間としては短いものだったが、非常に内容の濃い、充実した実習となった。学んだこと、気付いたことも多くあったが、最も感銘を受けたのはUNPADの教育システムだった。論文作成や英語のスキルについては前述した通りだが、UNPADの試験はディスカッションやプレゼンテーション形式で行われるのだ。我々も体験したが、自分の知識を活用して問題を整理し、どのように介入するかを考える、実践的な訓練であった。群馬大学でもTBLなどの講義があるが、その重要性を改めて認識することとなった。この一ヶ月間、参加したメンバーとは実習以外でも多くの時間を共にし、お互いの文化や考え、将来などについても存分に語り合った。この絆は、今後もずっと続いていくだろう(図11)。

最後に、本プログラム参加に際し多大なご支援を賜りました同窓会や後援会の皆様、鈴木庄亮名誉教授、鯉淵典之先生、小山洋先生、富士たちばなクリニックの先生、先生を始め公衆衛生学教室の皆様、お世話になりました全ての方々に、深く感謝申し上げます。